

【水との共存】

市原市立市東中学校 二年 根本 健太郎

いつになったらまとまった雨が降るのか。二〇二六年の一月・二月において、私の家ではこの話題で持ち切りだった。雨が降らないと畑の土はカラカラになり、クワで畝を作ろうとしても、乾いた土がサラサラと砂のようにこぼれ落ちてしまう。畑で作業しようとする足を踏み入れると砂埃が舞い、仕事にならない。植えてある野菜も育たない。そして、根を痛めて枯れさせてしまう恐れがあるから、うかつに野菜を触れることすらできない。祖父は長年農業を続けているが、「最近の気象は本当に異常だ」と話していた。テレビでもダムが干上がり、いつもは水中に沈んでいるはずのゴツゴツとした岩が見え、畑や田んぼまでもが干上がり、ひび割れてしまっている映像が流れていた。また、地域によっては取水制限が行われており、その報道を目の当たりにして、蛇口をひねれば水が出るという日常が当たり前ではないのだと考えさせられた。二月二十五日に私が住む市原市に三ヶ月ぶりとなるまとまった雨が降った。みんなが「恵みの雨」と喜んでいた姿が印象に残っていた。雨のありがたさ、水の大切さを実感した瞬間だった。

私が小学一年生の年の二〇一九年では、大雨災害が千葉県を襲った。私の家の近くでも川が氾濫して土砂崩れが起き、その影響で何カ所も通行止めになった。家の裏の土地からは大量の雨水が流れ込み、庭では足首までつかるほど水が貯まり、もう少しで床下浸水になるところだった。畑では野菜が土ごと流され、流された野菜は商品価値がなくなるまで破損していた。さらには、野菜が元氣よく育っていたはずの畑には水が貯まって、辺り一面が池のようになってしまった。水が引くまでは畑に入らず、元通りの畑に戻すまでに多くの時間と労力を費やした。大雨の威力、水の怖さを実感した出来事だった。

私たちの生活は水と共存している。その水をもたらす雨を、私たちは「恵みの雨」と呼んで歓喜したり、時には水害や災害を引き起こす雨を

「豪雨」と呼び、本来は天の恵みであるべき「雨」を忌み嫌う傾向にある。このような雨に対する考え方は、文明人のエゴに他ならない。

私たちは水と共存しているがゆえに、「水を大切に」と軽々しく吹聴する。しかし、果たしてどれ位の人々がその大切さを真剣に受け止めているのだろうか。水を当たり前に使っている私たちが水を無駄にせず、大切なものとして利用していくためには、きちんとした知識と何をどのようにつけ生活していくべきかを一人一人がもっと自覚して学んでいくことが大切なのだ。そして、現在各地で起きている災害・異常気象は今の生活を続けている限りでは解決できない問題であるという事実を、もっと自覚し、具体的な解決案を模索すべきなのではないだろうか。私の家では水を大切に使うために何ができるのか考えて実践している。水を出しっぱなしにしない、こまめに水を止める、お風呂にたぷりと水を貯めすぎない、洗濯物が少ない日は次の日にまとめて洗う、使用する水を少なくできる節水コマを使用する、雨水を貯めるためのタンクと桶を庭に置き農機具を洗うのに利用するなど、普段から水の使い方に気を付けている。

地球を取り巻く環境には「まった」はない。もうすでに地球が耐えられる限界まできてしまっているのだ。雨の降り方も雪の降り方も台風も暑さも何もかもが異常と言われる状態にある。

私たちみんなが知恵を出し合い、そして行動をすれば、少しずつではあるが事態の改善へ繋がるのではないだろうか。一人一人ができることは確かに小さなことである。しかし、ゼロからは何も生まれえない。一人一人の意識と行動が、今後の未来を変えてゆくのではないだろうか。